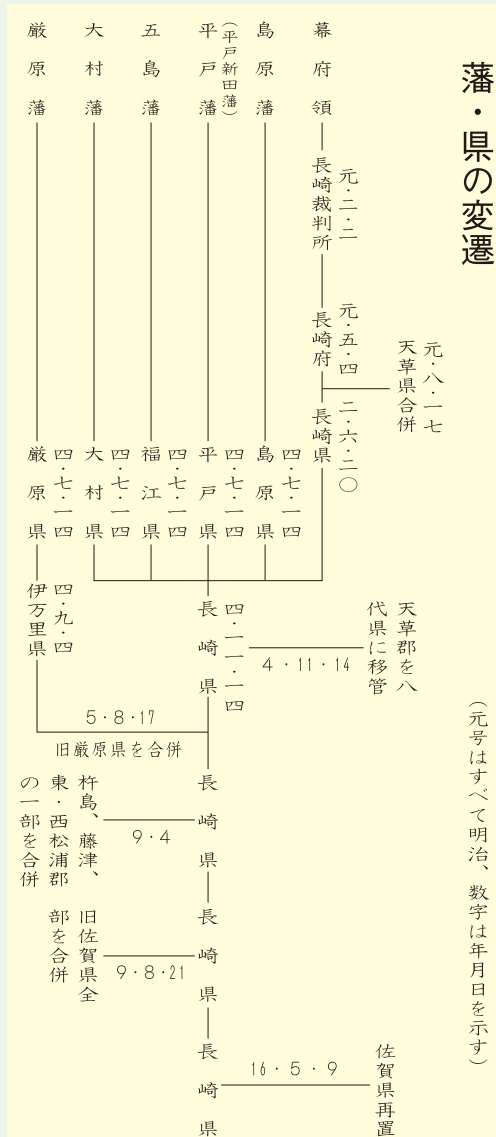


第5節 近代の長崎県

MEMO



1 長崎県の成立



山川出版社『長崎県の歴史』による

現在の長崎県の範囲は、どのような経過でいつごろ決まったのだろうか。

江戸時代の長崎県は6藩5領1幕府領に分かれていた。それが1871（明治4）年の廃藩置県により藩や領が廃止され、それぞれが一つの県となった。壱岐は、平戸藩に属していたため平戸県に入り、対馬は、伊万里県に属した時期もあった。

その後、佐賀県との間で離合がおこなわれ、1883（明治16）年、現在の長崎県の範囲が確定し、一つの県として発展することとなった。

1954（昭和29）年に出された町村合併法等もあって、10市、60町、1村ができた。

2000（平成12）年4月の地方分権一括法により、地方分権型社会の創造に向けた改革の中で、市町村の合併が進められた。

MEMO



2 近代産業の発達

グラバーは、長崎県の近代産業の基礎を築いた一人である。



グラバー邸

(提供:長崎県観光連盟)

(1) 造船業

明治政府は、造船業を盛んにするため、幕府がつくっていた鋳鉄所と、グラ

バーから買い入れた修船場を合わせて、1871（明治4）年に官営の長崎造船所をつくった。この造船所が現在わが国の造船業を代表する三菱重工業長崎造船所の始まりである。長崎造船所は、わが国最初の鉄鋼船をつくるなどして、明治時代の末ごろには東洋一の造船所といわれるようになった。その後、さらに発展を続け、昭和になると世界一の造船量を誇るようになった。

(2) 水産業

水産業も、石炭を利用する動力船の開発によって、手こぎ船による沿岸漁業から沖合・遠洋漁業へと発展した。

特に明治の末、グラバーの子の倉場富三郎によって始められたトロール漁法は、漁獲高をふやすことになった。また、真珠の養殖も始められるなど、現在の水産県長崎の基礎が築かれた。



3 港とともに歩む町

明治の中ごろまで、今の佐世保市は小さな漁村であった。この村に日本海軍の軍艦が港の調査にやってきた。2年余りにわたる調査の結果、佐世保港は広くて深く、風も受けにくいなど、軍港としての条件がそろっているということから海軍の鎮守府が置かれることになった。

MEMO



佐世保港

(©SASEBO)

日清・日露戦争のころ、日本海軍の前線基地となった。太平洋戦争が始まると、ますます軍の施設が増加したが、1945（昭和20）年6月28日深夜アメリカ空軍の爆撃を受け、佐世保の町は焼け野原になった。

第2次世界大戦後、佐世保市は平和都市宣言をおこない、新しい町づくりを始めたが、1950（昭和25）年朝鮮戦争が起こると、国連軍の基地となった。

やがて、1951（昭和26）年日本の独立と同時に日米安全保障条約が結ばれ、佐世保市にアメリカ海軍の基地がつくられた。その結果、多くのアメリカ人が住むようになった。

わが国を代表する天然の良港には、海上自衛隊の基地や造船所、漁港があり、佐世保市の特徴ともなっている。

また、港からは五島や西彼杵半島などへフェリーも通っている。

市は新たな町づくりにつとめており、佐世保市在住のアメリカ人との交流も盛んにおこなわれている。

軍人・
軍属

3,860人

家族

3,514人

合計 7,374人

佐世保市在住のアメリカ軍人・軍属とその家族（佐世保市基地政策局調べ）
（平成31年4月1日現在）